

では血栓のサイズと形状が不変のためヘパリン 15,000 単位/日の持続注入に変更し血栓溶解を期待した。6/23 午後 2 時 55 分に突然意識を消失し右麻痺が出現した。心エコーで血栓が消失していた。脳動脈造影で左中大脳動脈の完全閉塞が確認され、脳塞栓としては発症より超短時間で Intervention therapy の下、proUK にて血栓溶解治療を開始し完全再開通を得た。しかし再検した CT にて広範囲出血性梗塞、脳波で脳死状態と判定され、6/28 に死亡。心腔内の新鮮な血栓の溶解療法に問題を残した。

4) 左室心尖部に血栓を認めた anthracycline 系薬剤による心筋障害の 1 例

坂野 忠司・岩谷 淳 (新潟市民病院)
山崎 明・小田 良彦 (小児科)

症例は 4 歳の男児。生後間もなく先天性白血病の診断にて、アドリアマイシン 160 mg/m²、ダウノマイシン 300 mg/m² の投与を受けた。その後白血病の再発はなく経過していた。3 歳 7 カ月時より咳嗽、喘鳴が出現し他院にて気管支喘息の診断にて抗アレルギー剤を投与されたが、改善しなかった。4 歳 3 カ月時、食欲低下、嘔吐、浮腫が出現し心不全を主訴に当科紹介され入院となる。入院時の心エコー検査にて左室の拡大、左室駆出率の低下を認め、左室心尖部に径 10 mm の血栓を認めた。ドパミン、利尿剤により心不全の治療を行ったところ、入院 4 日目の心エコー検査では左室駆出率は改善しており、心尖部に認めた血栓は消失していた。この間、血栓症を疑うべき症状はなかった。入院 12 日目に心臓カテーテル検査、右室心内膜心筋生検を行い anthracycline 系薬剤の慢性心毒性による心不全と診断した。現在、患児は心不全症状を認めず元気になっている。

5) 小児期の肺塞栓症の 1 例

竹内 菊博・塚野 真也
佐藤 誠一・佐藤 勇
内山 聖 (新潟大学小児科)
藤井美恵子 (白根健生病院)
小児科

小児期の発症で、不可逆性の肺高血圧をきたした肺塞

栓症を経験したので報告する。

症例は 14 歳の女児。2 歳より脱力発作があり、5 歳時にもやもや病と診断され、6 歳時に当院脳外科で手術を受けた。10 歳時に腎血管性高血圧を疑われたが、当科で腎動脈造影を行い、否定された。13 歳時に学校検診で胸部 X 線上、左第 II 弓の突出を指摘された。心エコー上左室拡大所見であった。14 歳時より眼前暗黒点が出現し、1989 年 12 月 26 日にもやもや病の再手術を受け、1990 年 1 月 6 日に退院した。同年 2 月頃より咳嗽、動悸を訴え、2 月 15 日より胸痛が出現し、2 月 27 日に当科に入院した。入院後、胸部 X 線、肺血流シンチなどにより、肺塞栓症と診断された。シンチでは左大腿静脈の血栓性閉塞も疑われた。治療はヘパリンを使用した。経過中、胸痛の増悪と低酸素血症を認め、ウロキナーゼの使用で症状の改善をみた。退院前の心臓カテーテル検査では著明な肺高血圧を認めた。現在、原発性肺高血圧に準じた治療を行い経過観察中である。

6) 最近 10 年間に経験した肺血栓塞栓症 21 例の検討

丹呉 益夫・笠井 昭男
鈴木 薫・木戸 成生 (県立新発田病院)
熊倉 真 (内科)

過去 10 年間に経験した肺梗塞 21 例の臨床像を検討した。男性 7 例、女性 14 例で年齢は 28 歳から 82 歳だった。肺梗塞の診断は胸部レントゲン、肺血流シンチまたは剖検で行った。背景因子としては下肢静脈血栓症 5 例、心疾患 4 例、血管造影後 2 例、薬剤内服 2 例だった。主訴は呼吸困難 7 例、胸痛 6 例、失神発作 7 例 (2 例は DOA 例)、咳 1 例だった。心電図では右室負荷と思われ経時的変化を呈した症例が見られた。心エコー図では右心拡大 9 例、三尖弁閉鎖不全 9 例を認めた。死亡例は 6 例で急性死亡 4 例、慢性経過後の死亡例 1 例、肺梗塞以外の死亡例は 1 例だった。治療は酸素吸入、血栓溶解療法、抗凝固療法を行った。下肢静脈血栓、肺高血圧を伴った慢性肺梗塞 3 例中 2 例に IVC フィルター挿入を行ったが、行わなかった 1 例は 6 ヶ月後に死亡した。